

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：34603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13402

研究課題名(和文)『河海抄』を中心とした室町期源氏学の動向と展開に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Study on the Trends and Developments of the Tale of Genji in the Muromachi Period with a focus on "Kakaisyo"

研究代表者

松本 大 (MATSUMOTO, Oki)

奈良大学・文学部・講師

研究者番号：30757018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果内容は、おおまかには以下の3点にまとめられる。すなわち、これまでに刊行・報告された『河海抄』本文とは全く異なる、新たな本文の提示、『河海抄』研究における最新の成果報告と、今後の研究深化のための基盤整備、室町期源氏学の形成・動向・展開に関する、従來說への再検証の促進、及び、関連諸学問との連動性や影響関係を把握する上での、より正確な資料の提供、である。

なお、研究成果については、4年の研究期間中に、11本の論文と7本の口頭発表によって公開することが出来た。また、本研究の最も中心的な成果である、永青文庫蔵本『河海抄』の本文データ作成については、次年度以降に公開を控えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の『源氏物語』古注釈書・享受資料の研究が、作品読解のみに還元される成果を求めがちであったのに対し、本研究で得られた成果は、学際的な視点から『源氏物語』古注釈書・享受資料を位置付け直す点で、大きな学術的意義を有する。本研究では『河海抄』を中心に扱ったが、得られた成果及び手法は将来的に他の注釈書研究にも応用可能であり、今後の注釈書研究をめぐる基幹となりうる重要な役割を果たす。これは、『源氏物語』古注釈書の性格を根本から捉え直し、中世期の諸学問の検討資料として再定義するものである。特に、永青文庫蔵『河海抄』の本文データの作成・公開は、当該分野以外にも大きな影響を与えるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： The results of this study are roughly summarized in the following three points: (1) the presentation of a text that is completely different from the text of "Kakaisyo" published and reported previously; (2) a report of the latest results of the study of "Kakaisyo" that lay the groundwork for further research; (3) promotion of re-examination of conventional theories about the formation and development of the Tale of Genji during the Muromachi period. This allows for the provision of more accurate data that allows us to grasp the link and influence relationship between this topic and related research.

The results of this study were presented through 11 papers and 7 oral presentations over the course of a 4-year research period. The most important result of this research was the creation of data regarding the text of "Kakaisyo" in the Eisei library, which will be published in the next academic year.

研究分野：中古文学

キーワード：『源氏物語』享受 中世源氏学 源氏学 『河海抄』 『花鳥余情』

1. 研究開始当初の背景

平安期に成立した『古今和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』『和漢朗詠集』等の文学作品は、後世に大きな影響を与えながら各時代で享受されていった。特に鎌倉時代以降の享受については、必ずしも原典が直接参照されていた訳ではなく、各作品の注釈書や梗概書によって担われる場合が散見される。この現象は、平安期文学作品に対する後世の受容が、原典と注釈書類とが混ざり合いながら総体的に展開していたことを示唆する。この意味で各作品の古注釈書や享受資料は、原典と同列に扱うべき重要な資料と位置付けられる。

『源氏物語』を例にとると、その享受を考える際には、総体的『源氏物語』享受世界を想定することが求められる。特に古注釈書は、その古注釈書成立当時の作品享受の実相を鮮明に反映するものであり、注釈内容は当時の文化的背景や動向、諸学問の成果と密接に連関する。

こうした作品享受と古注釈書との関連については、『古今和歌集』『伊勢物語』に関しては片桐洋一氏(*1)、『和漢朗詠集』に関しては黒田彰氏(*2)等の歴大な研究の蓄積があるのに対し、『源氏物語』に関してはほとんど手付かずのままであり、基礎的な研究も著しく立ち遅れている状況であった。

その最大の要因は、従来の『源氏物語』古注釈書研究が、読解に還元される事象のみを対象とし、和歌や歴史、文化史などの他の研究領域との繋がりに関心を払わなかった点にあった。そのため『源氏物語』研究のみでしか通用しない希薄で単調な研究となってしまう、関連諸学問との学際的な研究成果を挙げる事が出来なかった。この状況は、近年、岩坪健氏(*3)や新美哲彦氏(*4)、河野貴美子氏(*5)等によって改善されつつあったが、未だ不十分な状況にあった。

本研究代表者はこれまで、上記の問題点を改善すべく、南北朝期成立の『河海抄』を基幹資料として扱い、『源氏物語』注釈史研究・享受史研究の抜本的改革を目指してきた。本書は、北朝の公家である四辻善成(1326～1402)によって編まれた注釈書である。貞治初年(1362)頃の成立と見られる本書は、後世の注釈書に多大な影響を与えた点で、『源氏物語』注釈史・享受史上、最も重要な古注釈書の一つとされる。しかし、その大部さと複雑な伝播の様相から、『河海抄』の基礎的研究は敬遠されてきた。そのため、現存諸伝本の分類や成立時の学問体系との関連性、注釈を施した意図や手法等、未解明な箇所が多く残されていた。また作者の四辻善成に関しても、『河海抄』自体の研究が十分でなかったために、他の事跡との繋がりは不明なままにあった。

*1 『古今和歌集以後』、笠間書院、2000。・『伊勢物語の研究』、明治書院、1968。*2 『中世説話の文学史的環境』、和泉書院、1987。*3 『源氏物語の享受 注釈・梗概・絵画・華道』、和泉書院、2013。*4 『源氏物語の受容と生成』、笠間書院、2008。*5 『花鳥余情』が説く『源氏物語』のことばと心(『国文学研究』第175号、2015・3)等

2. 研究の目的

本研究の目的は、『源氏物語』の古注釈書である『河海抄』を研究対象の中心に据え、各種の『源氏物語』古注釈書・享受資料そのものに対する基礎研究(諸本調査と注釈内容の検討)と、それぞれの古注釈書・享受資料が持つ学際的な価値や意義の解明を通して、物語読解への利用に偏りがちであった従来の研究状況を刷新することであった。

また、本研究代表者の研究は、源氏学を発端として、各時代の公家の学問のあり方を突き止めることをも目的とした。古注釈書成立当時の学問体系を踏まえた上で、注釈の有り様を一つずつ丁寧に紐解き、『源氏物語』古注釈書・享受資料の本来持つ学術的価値を中世学問史の観点から再定義することを目指した。

3. 研究の方法

本研究代表者は、前述した研究状況を改善すべく、『河海抄』を中心とした『源氏物語』古注釈書・享受資料に関する基礎的研究(平成27年度研究活動スタート支援:課題番号15H06783)及び「四辻善成の源氏学の形成と展開に関する基礎的研究」(平成24年度特別研究員奨励費:課題番号12J01276)の助成を受け、研究を積み重ねてきた。いずれも、諸本調査と注記内容の検討という基礎研究を土台として、先行研究が見落としていた学際的視点を取り入れたものである。本研究はこれらに続くものであり、これまでの研究成果を応用するとともに、継続して検討すべき課題や未達成の部分の補完するものである。

本研究では、4カ年計画のもと、以下の具体的な三つの研究課題に落とし込み、研究を進めた。なお、【1】～【3】は独立した存在ではなく、相互補完的な役割を持つ。そのため、各項の研究を並行的に進めるとともに、適宜これらを有機的に関わらせながら研究を推進した。研究方法としては、文献による実証を重視した。また、これまでの研究によって得られた知見や手法は、状

況等に応じた修正を適宜加えながら援用していった。

【1】『河海抄』の伝本調査と注釈内容の分析

各地に所蔵されている未見諸本の調査を行いつつ、諸本調査による本文分類とそこから窺える増補改訂の実態を把握し、本書の注釈姿勢や施注方法を総体的・網羅的に把握した。また、室町期の流布本的性格を持つ熊本大学附属図書館永青文庫蔵本の本文データを作成し、公開を目指した。

【2】四辻善成の源氏学の形成・展開と他の学問動向との連動・連関に対する考究

四辻善成の学問体系において、源氏学がどのような位置付けであったのかは、十分に解明されていなかった。この疑問を解消すべく、特徴的な注記内容を対象としながら、他の学問分野との連関の把握を試みた。また、先行する源氏学の撰取・利用の実態、後世の注釈への影響、歌学書・連歌論書等との関係にも検討を加えた。

【3】『河海抄』以外の古注釈書・享受資料に関する検討

上記【1】【2】で得られた成果を援用し、これまで看過されてきた注釈書や享受資料に眼差しを向けた。特に一条兼良と宗祇を対象の中心とし、源氏学と周辺諸学との接点に焦点を当て、『伊勢物語』や『古今和歌集』の注釈書、連歌論書、有職故実書、絵画資料等への影響関係を探った。

以上の三点を統合的に扱うことによって、中世源氏学の実態を実証的に浮かび上がらせた。各年度で行うべき課題はそれぞれの観点から設定してあったが、各項目を互いに連動させながら、考究を深めていった。

4. 研究成果

本研究の成果内容は、おおまかには以下の3点にまとめられる。すなわち、【1】これまでに刊行・報告された『河海抄』本文とは全く異なる、新たな本文の提示、【2】『河海抄』研究における最新の成果報告と、今後の研究深化のための基盤整備、【3】室町期源氏学の形成・動向・展開に関する、従来説への再検証の促進、及び、関連諸学問との連動性や影響関係を把握する上での、より正確な資料の提供、である。

【1】では、これまでの研究者の研究に継続するものとして、現存諸伝本の基礎的文獻調査・本文系統の整理を行った。特に、注釈史上最も重要な伝本と捉えている、熊本大学附属図書館永青文庫蔵本に対する重点的な調査と、その本文データの作成・公開を目指した。具体的には、巻十一と巻十五に関する論考をまとめつつ、永青文庫蔵本に対する細かな調査を行った上で、当該本の本文データ作成と、公開にむけての具体的な方策等の検討を行った。

【2】では、善成の学問体系における源氏学の位置付けについて、背景にある文化圏からの影響を中心に、具体的な注記や注釈内容から、先行する源氏学の撰取・利用の実態、諸学問の成果との関係等に検討を加えた。具体的には、以下の3点が成果として挙げられる。

1点目は、『河海抄』で用いられる「可随所好」という文言に着目し、様々な典籍における使用状況を確認した上で、当時の注釈に対する基本的姿勢の一端を明らかにした。

2点目は、重明親王の日記である『季部王記』を引用する注記について、その発生・展開・流入の経緯等の問題を精査した成果をまとめることが出来た。

3点目は、『河海抄』を強く意識した注釈書である、一条兼良『花鳥余情』との関係を重点的に扱い、『河海抄』を補完しようとする『花鳥余情』の性格を具体的注記から明らかにした上で、『河海抄』注記を理解する上での時代的(共時的)な問題・特徴を詳らかにした。また、その際、新出の兼良自筆『河海抄』断簡を調査することが出来たため、これについては資料紹介として、研究期間終了後に報告を予定している。

【3】では、前述の【1】・【2】で得られた成果を援用し、『河海抄』以後の源氏学における、周辺諸学との接点に焦点を当てた。具体的には、以下の3点が成果として挙げられる。

1点目は、室町中期を代表する連歌師である、宗祇を対象に据え、彼の源氏学・勢語学に検討を加えた。

勢語学に関しては、『伊勢物語山口記』を中心的に扱い、『伊勢物語』注釈史の流れを押さえながら、宗祇が残した数々の『源氏物語』や『伊勢物語』の注釈書との相関関係、また連歌書や歌学の面から見た宗祇の物語注釈の位置付け等について、詳細な報告と論文発表を行った。源氏学に関しては、『花鳥余情』を抄出した『花鳥余情抄出』への基礎的研究を行い、従来指摘されてこなかった、宗祇の源氏学の始発としての本書の性格を明らかにした。これとは別に、三条西実隆の手による注釈書である『弄花抄』についても、陽明文庫蔵本への基礎的調査を中心として、従来説の見直しを迫る問題点を洗い出すことが出来た。

2点目は、宗祇晩年の高弟である、宗碩の源氏学について、考究を加えた。宗碩の様相については、東北大学附属図書館狩野文庫蔵『聞源抄』・陽明文庫蔵『萬水一露』の二書に対する基礎的調査を通して、これまでの先行研究が見落としてきた、複数の特徴的性格を把握することが出来た。なお、陽明文庫蔵『萬水一露』については、研究期間終了後も、基礎的調査の継続を予定しており、『萬水一露』をめぐる従来説の再検討を行う計画にある。

3点目は、『源氏物語』享受の一端を解明する目的として、室町末期から近世中期にかけて見

られる、豪華な装飾色紙への抜き書き行為について注目し、詞に対する享受の体系的な把握の必要性・意義を指摘した。これについては、研究成果を『伊勢物語』絵にも波及させ、新出の『伊勢物語』絵を紹介・検討した上で、付された詞が後発的に絵に付されるという事象を指摘した。

以上が、本研究の成果内容である。なお、研究成果については、4年の研究期間中に、11本の論文と7本の口頭発表によって公開することが出来た。また、本研究の最も中心的な成果である、永青文庫蔵『河海抄』の本文データ作成については、次年度以降に公開を控えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松本大	4. 巻 第68号
2. 論文標題 詞による『源氏物語』享受の一端－『源氏物語詞散』の紹介をかねて－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『詞林』	6. 最初と最後の頁 32-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/77215	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本大	4. 巻 第17号
2. 論文標題 『源氏物語』葵巻の二つの引歌表現をめぐって－六条御息所詠と三位中将詠の引歌検討－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本文学研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松本大	4. 巻 第104号
2. 論文標題 『花鳥余情』における『河海抄』利用の実相	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中古文学』	6. 最初と最後の頁 82-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松本大	4. 巻 第69巻第1号
2. 論文標題 失われた作品享受 『源氏釈』の物語世界	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本文学』	6. 最初と最後の頁 76-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 -
2. 論文標題 冷泉家時雨亭文庫蔵『河海抄』の性格 『河海抄』巻十五論の前提として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 前田雅之編『画期としての室町 政事・宗教・古典学 』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 485-507
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 第55輯
2. 論文標題 宗祇『花鳥余情抄出』の位置付け	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『むらさき』	6. 最初と最後の頁 51-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 第103号
2. 論文標題 『伊勢物語山口記』の現存伝本とその性格	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『国文学（関西大学）』	6. 最初と最後の頁 111-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 第51号
2. 論文標題 『河海抄』における『季部王記』引用の再検討 角川書店版の本文をめぐる問題を基点として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『学芸国語国文』	6. 最初と最後の頁 96-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 -
2. 論文標題 併存と許容の物語読解 「可随所好」を端緒として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岡田貴憲・桜井宏徳・須藤圭編『ひらかれる源氏物語』（勉誠出版）	6. 最初と最後の頁 155-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 -
2. 論文標題 『河海抄』巻十一論 『李部王記』引用再考序説	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 松本大『源氏物語古注釈書の研究』（和泉書院）	6. 最初と最後の頁 57-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本大	4. 巻 -
2. 論文標題 『毘沙門堂本古今集注』と物語注釈	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間文化研究機構国文学研究資料館編『中世古今和歌集注釈の世界 毘沙門堂本古今集注をひもとく』 (勉誠出版)	6. 最初と最後の頁 205-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松本大
2. 発表標題 『源氏物語詞散』の紹介 詞としての『源氏物語』享受の一端
3. 学会等名 第305回大阪大学古代中世文学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本大
2. 発表標題 『河海抄』の『李部王記』引用 『花鳥余情』から見る記事補入の可能性
3. 学会等名 第291回大阪大学古代中世文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本大
2. 発表標題 『花鳥余情抄出』と宗祇の源氏学
3. 学会等名 第293回大阪大学古代中世文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本大
2. 発表標題 宗祇の源氏学における『花鳥余情抄出』の位置付け
3. 学会等名 中古文学会関西部会第51回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本大
2. 発表標題 併存と許容の物語読解 「可随所好」を端緒として
3. 学会等名 第282回大阪大学古代中世文学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松本大
2. 発表標題 平安文学作品の享受をめぐって
3. 学会等名 第22回奈良大学国語教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Okii MATSUMOTO
2. 発表標題 Commentary in the Provinces : The Meaning of Sogi's Yamaguchi Notes on the "Tales of Ise"
3. 学会等名 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------